

ウズベキスタンの高等教育における女性の困難

ー 当事者の語りに着目して

The Difficulties of Uzbek Females in Higher Education: Focus on Their Narratives

山名田 静

1. 研究目的

中央アジアのジェンダー研究第一人者である Kamp (2009: 7) が、国際的な研究分野として中央アジアの女性とイスラム教は注目度が高まっていると述べてすでに久しい。この研究分野が注目される理由は、いずれの国家もイスラム教と旧社会主義国という複雑な社会的背景をもち、多民族でありそれぞれ固有の伝統文化を継承していること、政治や言語が障壁となってデータが収集しづらいことにあると筆者は考える。

「中央アジア地域は、長くかつ多彩な歴史の過程のなかででき上がった独特な伝統、社会、文化を所有し、独自の生活様式や価値観を持って」(トフタミルザエヴァ 2016:114) いる。中央アジアで最大の人口(約3,300万人)を有するウズベキスタンは、国民の95%以上がイスラム教徒でその大半がスンニ派信者であるが、「ソ連時代の宗教政策や教育の影響で、時にはムスリムであることと矛盾する行動も見られる」(ダダバエフ 2008:11) と言われており、歴史的・政治的背景と宗教・慣習が複雑に絡み合っただけで社会的性差が生じている。

独立後に長く続いた独裁政権¹で、元来の保守的な民族気質をもった同国民の Gender Equality Issues は、国連をはじめ人権問題を取

り扱う国際団体やジェンダー研究の専門家たちから強く注視されてきた。ジェンダー平等政策を推進したソ連時代は、女性が高いレベルの教育を受けられるようになり、労働力として社会参画することが可能となっていたが、ソ連崩壊後は「国営企業の解体と市場経済の採用により、男性と女性の役割に関する伝統的な見解と態度が急速に再浮上した」(ADB 2014:10) ためである。「多くの旧ソ連国と同様に、ウズベキスタンの女性たちにおいても伝統的な固定観念が復活し、社会における役割が低下した」(ADB 2014:9)。

とくに、「ソ連崩壊後に経済危機を迎え、女性は教育発展の犠牲者となった」(Ibrahim 2013: 53) と言われている。トフタミルザエヴァ・蒲生 (2014:163) は、粗就学率におけるジェンダー格差はソ連解体後に拡大し、趨勢としては縮小傾向にあるものの、高等教育で最も格差が大きいことを指摘した。アジア開発銀行 (2014:34) も同様に、初等教育の就学率では男女平等が達成されているが、高等教育における女性の就学率は男性より低いと報告している。

ここで、高等教育機関²への入学に関するデータにふれたい。UNESCO によると2017年の高等教育機関への総就学率は9.15%で、これ

は世界的に見ても最も低い層にあり、男性は11.32%、女性は6.88%である。高等教育の就学における男女平等指標は0.61 (World Bank 2017) であり、2009年の調査開始以降グラフの推移に著しい変化がなく、男女格差が確認されている。なお、2017年は最も受験者数が多く、66,584の募集に対して729,947の出願があり志願倍率は約11倍であった (MHSSE 2015)。また、平均授業料は2008年から2012年の間に453ドルから1,842ドルへと4倍に高額化しており、この上昇率は同国の経済成長をはるかに上回ると World Bank (2014: 77) は指摘している。ウズベキスタンの1人当たり国民総所得は2,020ドル (2018) であり、年収並みに高額な授業料を支払うことが必要となる。それだけの学費を娘に費やすことに価値を併せ持つ親でなければ、女性が高等教育を受けるチャンスは無いということである。

先行研究によると、女性の方が高等教育における就学率が低いことの要因は、伝統的な社会規範や固定観念、あるいは文化的慣習によるものであると指摘されている (トフタミルザエヴァ 2016, ADB 2014, 嶺井・川野辺 2012など)。最も代表的な例は、早期 (18~20歳) の婚姻であり (トフタミルザエヴァ 2016, ADB 2014, Coalition of Uzbek women's rights NGOs 2009b:28など)、親がお見合い結婚させたり、妻を家庭生活に専念させるもので、とくに強固なジェンダー・ステレオタイプが存在する地方や家庭がある。

また、高等教育機関は都市部に設置されていることが多いため、学生は自宅を離れて寮生活を送る必要があり、更なる金銭的負担と両親の監視下から離れることに対する抵抗感によって、女性の就学機会を制限することにつながっている。娘に対する金銭的負担を拒む理由は、娘は結婚後に夫の家庭で暮らすことになり、息子は両親と同居を続けて老後の世話をすることから、息子の教育を優先するためである (トフタミルザエヴァ 2016:116,

ADB 2014:31)。両親の監視下から離れることに対する抵抗感は、その期間における娘の素行が周囲から不安視されやすいことで婚約成立に不利となるからである。

こうした問題の解決策として、Coalition of Uzbek women's rights NGOs (2009b:7) は「遠隔教育講座の開発を推進すること」、「インセンティブを導入して、貧しい家庭の女兒に学校、大学進学を支援すること」、男子が学ぶ学問と認識されている「工学、法律、産業および建設、運輸および通信、農業大学の各部門に入学する女子に奨励金および奨学金を支給する」ことを提案している。前者に関連して、政府は過去に通信教育課程と夜間学部を廃止した経緯があったが、2017年から再び通信教育課程と夜間学部の設置を推進しており、2017/2018で1万人 (The State Committee of the Republic of Uzbekistan on Statistics 2018) が通信教育によって学んでいる。しかし、筆者が2019年に行った現地での聞き取りにおいては、通信教育課程についての認知度は非常に低いようであった。プログラムには女性の進学希望が多い教育や手芸の分野も含まれていることから、今後の女性の就学率に貢献することを期待したい。

以上、先行研究およびデータから高等教育における女性の困難について整理した。2016年12月の現政権発足以降、ミルジヨエフ大統領のイニシアチブのもとで政治・経済・教育などの多方面に渡って改革が推し進められ、女性の (教育分野を含めた) 権利を守ろうとする法制化の動きがある (UzDaily 2018a)。今や女性は政治的な抑圧を受けておらず、「女性たちの中に、より自由かつ多様な暮らしや働きを求める動きが広がり始めている」

(JETRO 2018) とする報告があるものの、未だ男女平等に関する法律はなく、変化は十分でないという指摘がある (openDemocracy 2019) うえ、データからは女性の高等教育事情に大きな変化が認められない。

先行研究でも言及されているように、ウズベク人にとってフェミニズムは外国の思想であって、自分たちのものではないという反発感情がある。しかし、若者、特に大学生が革新的なジェンダー認知を示しやすいことは通例となっており、政治の転換期を超えたウズベキスタン社会においても例外ではないはずである。ところが、こうした時代の過渡期においても、女性の高等教育における就学率の低さとその主要因とされる女性に不利な伝統的性役割が強く問題視されてはいるものの、当事者である女子大学生の声を聞き取り、そこから分析した英語および日本語の研究は、筆者が主要な論文検索システムを用いた限り見つからない。これは25年間続いた初代大統領政権時代に国家の負の側面について聞き取り調査を行うことを困難とする政治的抑圧が行われたことが主要因であると考えられる。

そこで本論文は、ウズベキスタンにおいて女性が高等教育を受ける上での困難を当事者目線で捉え直すことを目的として、現役女子大学生を対象にインタビューを行い、大学受験・大学生活・卒業後の進路という過程においてどのような環境で何を思い、大学生活を送っているかについて調査する。それにより、当事者が受け入れやすく、より効果的な対策の立案に有用な示唆を与えることを目指す。

2. 調査方法

筆者の地縁と社縁を活用して、首都タシケントにあるX大学の学生の中から留学および大学院進学、専門的な職業に就くことを目指すキャリア志向のある女子大学生3名（A～Cさん）にインタビューとして調査協力を得

た。選定に際しては、多民族国家であるため対象者に様々な血統が混ざり合うことは避けられずとも、ウズベク民族を対象とすることでウズベキスタン国民の多数派³の考え方が調査に反映されるよう意図した。ただし、限られた条件下でサンプリングを行ったため筆者と調査協力者は知人関係にあり、こうした関係性がインタビューに影響を与えた可能性は否定できないが、彼女たちの葛藤は同国内で誰にでも理解されるものではなく、筆者との関係上でこそ聞くことができた語りでもあった。調査実施時期は2019年5～6月である。

調査方法については、インタビューが経験や思いをどのように意味づけるかに着目するためライフストーリーの手法を取り入れ、大学進学目的と進路選択、大学受験と大学生活における学習環境、今後のキャリア形成について展望を聞き取るために半構造化インタビューの手法を採用し、答えによってそれを深める質問を行った。1回あたりのインタビュー時間はおよそ1時間半で、Aさんに限り補足のため2回目のインタビューを行った。

なお、インタビューは日本語中上級レベル（N2～3）であるため主に日本語でインタビューを行い、必要に応じて英語とウズベク語を用い補完した。ただし、逐語録作成に際しては、読みやすくするために意味やニュアンスが変わらないよう十分注意を払ったうえで、正しい日本語へ若干の修正を行った。

すべてのインタビューに対して調査目的を説明し、研究参加、匿名化、ICレコーダーによる録音について同意を得た。実施場所は個室を確保し、インタビューレコード作成に際しては個人が特定されないよう固有名詞を

表 1. インタビュー調査対象者リスト（※年齢は調査当時）

インタビュー	性別	年齢	浪人年数	出身地	ジェンダー認識と受容
Aさん	女性	24	2年	タシケント州	差異を認識し、強く批判的
Bさん	女性	23	1年	タシケント市	差異を認識し、強く批判的
Cさん	女性	20	1年	ブハラ州	差異を多少認識しつつも肯定的

イニシャルまたは人称代名詞に加工した。

3. 調査結果

インタビュー逐語録をもとに時系列に整理して局面ごとの困難とナラティブに焦点を当てて各インタビュー어의学習環境に影響を与えたマイナス因子とその葛藤を浮き彫りにする。また、共通する要素に焦点を当てながら問題を検討する。

3-1-1. Aさんのバックグラウンド

Aさんは両親および弟との4人暮らしで、2人の姉はすでに結婚して家庭を築いている。ウズベク民族でありタタール人の系譜も継ぐ、イスラム教を熱心に信仰する一家である。

父親は大卒、母親は高卒で共働きをしている。両親は温厚な性格で、子どもに対してははじめは反対することがあっても、子どもの意見によく耳を傾け、段階的にそれを受け入れて支持してきた。Aさんの弟は一度大学受験をしたが、勉強不足で失敗し、本人の意思で浪人せずに就職している。姉が恋愛結婚するときにも、相手がフリーターだったために反対したが、本人たちが懇願したため承諾したという経緯があり、親の考えを子どもに押し付けるタイプではないが、Aさんに対して「そろそろ結婚すべき」との考えは譲らない。

大学でのAさんは成績優秀で、積極性のある学生である。数か月後に国費留学生となる予定である。

3-1-2. Aさんの語り

【大学受験】

一般的に、娘に大学へ行くよう勧める親は少ない。Aさんの親もとくに勧めることはなく、姉2人も大学に進学していないが、Aさんは自分の意志で大学受験することを決めた。理由は、大学に行かないことがすなわち高校卒業後すぐに結婚することを意味しているからだった〔①：進学動機〕。Aさんは結婚す

るにはまだ若すぎると感じており、結婚を遅らせるために大学へ行こうと考えた。結婚することで女性にはたくさんの義務が課せられる。たとえば、夫と義両親の世話をしなければならず、自分の意見は言わずにいつも笑顔で「はい」と言わなければならないというものである。Aさんはそれができないので結婚したくないと思っていた。

進学したいと母親に伝えたときの反応は、予想していなかったという様子で、消極的ながら賛成した。学費は大きな負担になるが、消費社会化と物価上昇が進む中、Aさんの姉2人が専業主婦で家計が苦しくなっている様子から、母親は共働きが必要な時代であると認識するようになり、就職するためには学歴が重要であることからAさんの進学希望を受け入れるに至ったのである。

Aさんは英語学科と日本語学科のどちらを受験するか迷っていたが、母親はサポート的な姿勢で進路相談に応じ、最終的に自ら日本語学科を選択して志望校を決定した。

受験勉強については、両親は「家事を手伝わず、勉強に集中して良い」と表面的には言いつつも、実際にAさんが勉強だけをしていると怒りだすため、勉強だけに集中することはできなかったという〔②：受験勉強〕。塾には2~3か月通い、塾で使っているテキストの情報を集めると自宅学習に切り替えた。

結果としてAさんは2浪した。それまで懸命に勉強したことがなかったので苦労したが、理解が深まるにつれて勉強が楽しくなり、勉強に対するモチベーションは高まっていった。その一方で、この間における両親のAさんを早く結婚させようとする働きかけも強くなり、浪人2年目には「次もだめなら結婚しろ」と迫られた〔③：浪人〕。そのプレッシャーを乗り越え、Aさんはついに大学合格を果たす。

高校の同級生（約40人）で大学に合格したのはAさんのほかにもう一人女性がいただけで、ほかの多くはあまり受験勉強をせずに1

～2回大学受験をして、諦めていった。

【大学生活】

大学の授業に選択科目はなく、授業は概ね午後1～6時の間にまとまって行われる。Aさんは大学から帰宅すると、まず家事をするのが日課である。夕飯の支度をし、食後は後片づけなどをして、夜10時くらいまでに家事を済ませてから宿題や課題に取り組む。平日は平均4時間ほどを家事に費やす〔④：家事〕。日曜日は昼食の支度に掃除と洗濯が加わるため7時間ほど家事をする。母親は仕事をしているので家事をしない前提になっており、とくに娘がいる家庭では娘が幼い頃から掃除を担当する⁴。Aさんの場合は20歳頃から調理も担当するようになったが、Aさんの従妹は14歳から家事のすべてを担った。家庭によって調理を担い始める年齢は様々であるが、家事の主力が娘となるのはウズベキスタンで一般的である。なお、Aさんの弟が家の手伝いをする頻度は週1回程度で、内容は畑仕事である。

Aさんと同じX大学に通うある男子学生は、家に帰ると自室に閉じこもり、ひたすら勉強だけをしているらしい。良い成績をとり、良い学歴をつけることで良い仕事に就けると考えられているため、男子学生の方が勉強する環境に身を置きやすい。Aさんの目には、男性の方が楽をしているように映る。しかし、Aさんは弟など誰かに家事を手伝って欲しいと思うことはなく、自分が家事をするのは当たり前前で、むしろ家事と勉強の両立はやりがいがあると述べる。しかし、勉強が忙しくて親に理解してもらいたい時もある。「昨日も母が帰ってくるまでに台所を片付けて全部きれいにし、料理もしておきましたが、母は『どうして庭を掃いていないの？洗濯はしていないの？』と私を責めました。洗濯はあとでするつもりだったのですが、腹が立って話すのをやめました。」と不満を漏らした。

家庭内だけではなく、大学内でも男女の役

割について考えることがある。ある女性教師は、プロジェクターの設置という女子学生でも手伝えるような簡単な作業を男子学生にしか依頼しない。また別な女性教師も授業中の雑談で「女性は旦那の親を、旦那を、そして子どもを世話しなければならない。女性に自分の世話をする時間はない。」と言うことがあった。ウズベキスタンの女性はこのように家事をして男性を支えなければならない、家族のために我慢しなければならないと常々教えられており、教師の言葉はごく一般的な価値観であったが、Aさんをはじめ複数の女子学生たちがこの言葉に疑問を抱いて話題にしたという〔⑤：ジェンダー・ステレオタイプ〕。

Aさんは、ウズベキスタンの伝統的な価値観がジェンダー・ステレオタイプそのものであり、それによって苦悩を抱える女性を解放したいと考え、これをテーマにして日本語弁論大会に出場した経験がある。学内大会では準優勝し、全国大会でも入賞を果たした。

Aさんは、自分のようにジェンダー・ステレオタイプを捨てるべきだと考える女性は増えてきているが、我慢することに慣れすぎていて、男性や親にはっきりと自分の意見を言える人はほとんどいないと言う。また、同世代の若い男性はこうした考え方に否定はしないと思うが、積極的に受け入れようという雰囲気は感じられないとも話した。

結婚を先送りにすることを最大の理由として大学に入ったAさんであったが、受験勉強と大学の授業を通して学問に対する姿勢や考え方が一変していった。例えば、外国人語学講師の質の高い授業と、ウズベク人とは異なる考え方をもっていることに影響を受け、自分もほかの国で高いレベルの教育を受けて人として成長したいと考えるようになり、留学を目指すようになったのである。

他方、Aさんの母親はAさんより年下の従妹の家に結婚相手を探す男性の親戚がたくさん訪れていることを聞いて羨ましくなり、A

さんよりも従妹の方が早く結婚するなら悲しいと嘆く。実は、Aさん宅にも結婚相手を探す男性とその親戚が訪れたことがあり、Aさんは急遽その場でお見合いをすることになった経験がある。男性がAさんに留学の意思があることについてふれ、「もし結婚するとしたら（留学を）どうしますか」と尋ねると、Aさんは「私はまだ結婚していませんから」と答えて暗に断った。この時のことについてAさんは「知らない人と結婚について話すのは嫌でした」、「どこかへ行ってお見合いをするんだったら私は断ったのに、家へ来たので断れなかった」と、お見合いに対する拒否感を強く示した。

Aさんの母親は、Aさんが大学を卒業したらすぐに結婚することを強く望んでいる。Aさんは、大学生のうち勉強を理由にして結婚を先送りにすることができるが、大学を卒業したら理由がなくなってしまうため、いずれ結婚を受け入れなければならない時が来るだろうと懸念している〔⑥：結婚〕。この点において、留学することはAさんにとって都合がよい。学部生には1年間の短期留学プログラムに参加するチャンスがあり、日本の大学で取得した単位はX大学で認定されないため、留学した場合は1年留年することとなる。学生の期間が延びればそれだけ結婚を先送りできるため好都合なのである。Aさんは卒業後に日本の大学院に留学できれば、さらに結婚を先送りできると期待している。

国費留学へ応募する際、母親は「Aに外国で生活する能力はない」と反対したが、話し合ううちにAさんの思いを受け止め、承諾するに至った。その後、Aさんは合格の知らせを受け取った。両親は喜んだが、近所に住む親戚はAさんの母親に「娘に1年も外国に行くことを許すの?」「日本になんて、誰が行きたいと思うのか」などと悪口や陰口を言い放った。女性が留学することに対して社会では否定的な見方が強く、Aさんはそれを十分理

解しつつも、自分の親戚に言われることは想定していなかったと落胆した〔⑦：留学〕。

【卒業後の進路】

Aさんは大学卒業後、日本の大学院に留学し、帰国後は日本語教師として働いて専門性を磨き、自立したうえで結婚して、仕事を続けていきたいと希望している。

卒業前後までに結婚する同級生たちは、出産を控えることになり、就職はしない。ウズベキスタンの法律では産前産後休暇や育児休暇をはじめ、育児中の短時間勤務制度なども法整備されているが、それを利用して働きながら子どもを育てるということは現実的でなく、Aさんが客観的に見て無理だと感じている。子どもが多ければ多いほど良いとされる家族観から第二子、第三子を期待され、妊娠しながら家族の世話をするだけで大変であることが理由だ。このように、女性が大学で勉強しても、その専門性を生かして働き続けることができないのは問題であるとAさんは主張する。他方、学ぶ姿勢が十分ではなく目的意識が薄い学生に対しては良い結婚相手を見つけるために大学へ来ているように見えることもある。大学に進学すれば大卒者とお見合いするようになり、お見合い相手の学歴がランクアップして男女ともに「条件の良い人と結婚できる」ためである。

Aさんは結婚したら夫と家事・育児を分担して仕事をしていきたい、それを理解してくれない人と結婚するつもりはないというポリシーを持っているものの、自分の結婚に対してリアリティを感じておらず、今は自分の結婚生活を想像もしていないと言う。それよりもまずは「ひとりで自立して暮らしてみたい」という願望がある。ウズベキスタンでは一人暮らしをする文化がなく、家族と同居するか、あるいは兄妹、親戚、友人などと共同生活するのが一般的であるが、Aさんは自分で部屋を借りて、専門性をもって働きながら生活す

ることに憧れており、それを経験したら結婚が楽しみになるのではないかと語った。

将来の職業について、家族は稼ぎが良いとされる観光ガイドになることを勧めるが、Aさんはお金を稼ぐことにも観光ガイドの仕事にも関心がない。それよりも、教師の仕事は次の世代を育てることであり、社会の役に立つ大切な仕事だと考え、価値を置いている。

【友人／姉の結婚生活】

すでに結婚した高校の同級生たちは、結婚前は結婚を楽しみにしているように伺えたが、今となっては「こんなに早く結婚したくなかった」「大学に行きたかった」と口を揃える。「大学でどんな勉強をしているの？」と聞かれてAさんが答え、「実は大変だ」と言うと、「楽しそうね。最高だよ、勉強するのは。私もできれば大学に行きたかった」と言われる。つまり、早婚した女性たち自身は「もっと遅く結婚したい」と思っているが、親からのプレッシャーを受けて、早く結婚しなければ良い相手を見つけられないのではないかと心配し、結婚を急いでしまうことが多いのだという。Aさんの高校・大学の同級生で結婚した人のほとんどがお見合い結婚をしているが、Aさんは「まずは友達になって、それから付き合っただけで結婚できたらいいのに、お見合いしてすぐに結婚を決めるのは鬱やストレスの原因になる」と言い、ウズベキスタンのお見合い形式に批判的である。

Aさんの両親はAさんが恋愛結婚しても良いとは考えているが、一般的に恋愛結婚には条件が課され、お見合いでほかに良い候補者がいれば認められないケースもある。Aさんの知り合いは、恋人がいても親が決めた他の人と結婚することになってしまったという。

すでに結婚した大学の同級生からは、「旦那の親や子どもの世話をするのは大変だし、旦那の妹たちの愚痴を聞くのも大変」という話や「旦那に手伝わってとお願いしたら、みんな

の前で手伝うのは恥ずかしいことだからできないと言われた」という話を耳にしており、Aさんをはじめクラス全体の結婚願望は低下している。ウズベキスタンでは夫の立場として実母や姉妹よりも妻を立てることが難しいうえ、男性が女性の仕事をするのは恥ずかしいことだと考えられており、夫が妻を手伝うことで「妻が主人だ」と揶揄されてしまうものだという。そのため、夫に「手伝わって」と言うことさえできない人もいる。恋愛結婚をしたAさんの姉は、たとえ育児のことであっても夫に「手伝わって」と言うのは絶対に無理だと愚痴をこぼす。昔からの考え方で「妻は家族のために我慢しなければならない」と教えられており、多くの女性は「自分が我慢すればいい、そういうものだ」と考え、提案する前に諦めてしまう。

Aさんの結婚観は高校生のとき以上にネガティブとなり、結婚することは楽しみでないという。ただし、結婚しなければ将来ひとりで暮らすことになり、寂しくなるので結婚しなければならぬという気持ちもある。それ以外に結婚する理由は見つかっていない。

3-1-3. Aさんの困難

Aさんの語りにおいて重要な局面であると考えられる①～⑦においてAさんの**学習環境**に生じた**マイナス因子**あるいはAさんの**心の葛藤**に焦点を当てて考察する。

[①：進学]

先行研究でも「高卒女子の多くは卒業後すぐに結婚する。女性が高等教育を受けると生活水準や夫への要求も高まるという考え方から、親も高等教育を重視しなくなった」(ダダバエフ 2008:180)と述べられており、Aさんの同級生たちの状況と概ね一致する。Aさんはこのような環境の下、ポジティブな目標をもって大学受験をしたのではなく、結婚を先送りするための手段として大学に行くことを

決めた。また、Aさんの場合も親が進学を勧めたわけではなく、Aさんが親を説得した構図となっている。

[②：受験勉強]

一般的に、親は娘に対して必ずしも受験勉強より家事を優先させるわけではないが、娘が家事を手伝う、あるいは大部分を担うということは当然の文化であり、Aさんの両親は受験に対して受身の立場からスタートしたという経緯もあって、Aさんの受験を家事から切り離して考えることは難しかったようである。それでも、受験当時の家事量は現在Aさんが担うものより少なかったことから、両親の気遣いのほどを伺い知ることができる。

[③：浪人]

Aさん自身は1浪してから本格的に勉強するようになったと話しており、浪人生活で経験した苦労が国費留学のチャンスをつかむほど学問に目覚めるきっかけになっているが、その一方で、受験と結婚という二重のプレッシャーが日増しに強まっていく状況に置かれていた。もし3回目の受験も失敗していたら、大学を諦めることで生じる悲しみも二重となっていただろう。

[④：家事]

日本の大学生は一人暮らしの場合は一通りの家事を行うが、自宅生の場合は多少家事を手伝うことはあってもほとんど行っていない(藤田 2015)。ウズベキスタンの場合は全く対照的で、自宅生の方が圧倒的に家事に従事する時間が長い傾向にある。寮などの共同生活の場合はルームメイトと家事を分担するうえ、他者を世話することもなければ部屋も狭く、家事量は少なく済むが、長期休みは実家で家事の手伝いをして忙しく過ごす。なかには子どもが帰省するまで雑務を溜めておく親もいる。Aさんの「勉強が忙しくて家事が十

分できず、親に理解してもらいたい時もある」との言葉からも、親がAさんの勉強を家事以上には重視していないことが伺える。

Aさんは基本的に家事を負担に感じていないと話しているが、男子学生の勉強に集中できる環境を羨ましく思う気持ちもあり、学習環境に差があることを認識している。そのうえで、自らの環境に不満を呈さず、むしろやりがいがあると述べていることは、意識的に肯定化して見せているようにも伺える。

[⑤：ジェンダー・ステレオタイプ]

嶺井(2012:91)は女性教師が女子学生に対して、女性が高い学歴を得て社会的評価の高い職業を得ることは必要ではないとの固定観念を植え付けていることを指摘したが、本調査では女性教師が女性を夫と義父母に尽くすのが美德であるというもう一つの固定観念を植え付けていることが示唆された。換言するならば、女性教師の存在が学問や専門的な仕事での成功に目を向けさせるものではなく、結婚したら学問や仕事よりも家庭を優先すべきであるという伝統的な価値観を強化するものとなっている。

Aさんはこうしたジェンダー・ステレオタイプによって抑圧されている女性が多いと気づき、異論を唱えている。Aさんと同級生は、教師の言葉に対してあからさまに反発することはなくとも、これまで当たり前とされてきたジェンダー・ステレオタイプに疑問を持つようになっていくことが明らかにされた。また、ウズベキスタンの伝統的な価値観がジェンダー・ステレオタイプになっているというAさんの批判が、ウズベク人の審査員(主に男性)が3分の1程度を占める日本語弁論大会で入賞したということは、社会的に受容され得ることを示唆しているのではないだろうか。ウズベキスタン日本語弁論大会のこの数年の上位入賞者には、女性発表者によるフェミニズムに紐づくテーマが散見されており、

意識の高まりが見て取れる。

[⑥：結婚観]

ウズベク人にとって最も大きなライフイベントは結婚であり、その根底には家族が最も大切であるという価値観がある。しかし、Aさんは結婚に対してネガティブなイメージしかなく、結婚を望んでいない。将来への不安から結婚の必要性を感じ、結婚相手とは絶対に家事・育児を分担しようと思意しているものの、進学によって結婚を先送りする手段が尽きるときが来ることを内心で恐れている。

[⑦：留学]

ウズベキスタンでは経済自由化に伴う外国企業の参入や外国人観光客の増加など様々な国際化の影響を受けて外国語熱が高まっており、多くの若者が英語をはじめとして何らかの外国語を学んでいるか、学ぶ必要性を重く受け止めている。そのような中、留学に憧れる学生は多い。しかし、女性に高等教育は必要ないという考え方に加えて、婚約・結婚に伴う両親あるいは相手家族の意向によって留学を断念する女子学生は多く、外国で影響を受けて伝統に背くのではないかというマイナスイメージがつきやすいことから一般に親世代は女子学生が留学することに否定的な傾向がある。Aさんについては、親しくしてきた親戚がAさんの留学を非難する理由が明確でなく、妬みのようにも伺えるが、否定するための一般論は様々にあることも読み取れる。

3-2-1. Bさんのバックグラウンド

Bさんは両親および兄弟の5人家族で、両親は大卒で共働きし、兄は大学院進学を控えており、高学歴家族で比較的裕福な家庭だと思われる。父親は海外出張の経験が多く、欧米的な価値観をもったタイプである一方、母親はウズベクの伝統的な価値観を重視するという対照的な夫婦のもとで育てられた。

Bさんの外見は髪が長く、上品な話し方と振る舞いをする女性だが、幼い頃からサッカーが好きで、兄弟と一緒にサッカーをして遊んできた。サッカーは女性がするスポーツではないという周囲の反応や、サッカーをしたという女性が他にいないことに対して強い反発心を抱いてきた。こうした考え方は父親の影響を受けたものであり、学問、趣味、仕事などあらゆる面において女性であっても本人が望む自由な生き方をすべきと考えているため、ウズベクの伝統的な価値観に対して否定的であり、母親と何度も対立してきた。

高校卒業から約4年経つが、高校の同級生のなかで大学に進学した、あるいは結婚していないという女性はBさんだけである。

3-2-2. Bさんの語り

【大学受験】

両親はBさんが幼い頃から高等教育を受けるべきだと諭してきた。Bさん自身も大学進学を希望し、両親は快くそれを支持した。

ところが、進路については母親と対立した [①：進路選択]。ウズベキスタンでは学問分野にジェンダーが強く反映されており、女性は医療や教育といった特定の分野で学ぶものだと考えられている。Bさんは「男っぽい仕事が好きなので」法律や経済を学びたいと希望したが、その言葉の通り法律・経済は男性が大半を占める分野であるため、母親はBさんの希望を受け入れず、教育分野へ進むよう勧めたのである。Bさんはそれに従い、高校で学んでいた日本語で教師の資格が取得できる学科を受験することにした。

Bさんの家庭では父と兄も家事に協力して、Bさんが受験勉強に専念できるよう協力した。父親は積極的に家事に参加し、妻より早く帰宅したときは進んで夕飯の支度を担当している。兄も料理が好きで、インターネットでレシピを探すなど楽しみながら料理をすること、一般のウズベク文化とは異なる家庭

環境がある。

Bさんは家事に時間を割かず、受験対策のため塾に通ったが、結果として一浪した。受験に失敗したことで当然落ち込んだが、周囲から「女性に勉強は必要ない」「結婚した方がいい」と言われたことがさらに悲しみを深めた〔②：浪人〕。友人のなかには、成績優秀で大学進学を望んでいたのに両親が決めた人と結婚して進学することができないケースが多かった。Bさんは「なぜ女性は勉強する必要がないのか」と悔しさをバネにして勉強を続け、一年後にトップの成績で大学に入学した。

【大学生生活】

Bさんは大学3年生になった現在も優秀な成績を維持しており、学費の一部免除を受けている。家事は現在も家族で協力し、Bさんは英語の塾にも通って平日は学問を優先するかわりに、日曜日は一日中家の掃除をする。

Bさんが在籍するX大学は日本の大学と留学制度の協定を結んでいるほか、国費留学制度で日本へ留学する学生・教師も毎年いる。Bさんも留学を希望しており、家族と何度も話し合いをしてきた。「父は『日本を見なさい』『(留学の機会を掴むために)勉強しなさい』と私を励ましてきました。しかし、母と兄に反対されたので(留学試験に申し込みが)できませんでした」と話す〔③：留学〕。母と兄が反対する理由は「イスラム教では女性がひとりで家を出たり旅行してはいけないと考えられている」、「悪いイメージがついて結婚しづらくなる」というものである。Bさんの同級生ですでに留学を経験した女性は、帰国後たくさんの人に「どうして一人で行ったの?」と言われた。悪いイメージの例としては、異性と関係をもったり、視野を広げて外国の影響を受けたファッションをしたりすることが挙げられた。このようなイメージによって結婚しづらくなるため、留学前に結婚し、結婚相手を連れて留学するという流れが女性にと

って望ましいと考えられているが、当然これには費用の問題や相手家族の理解が得られるかという問題が生じる。そのため大半の女性は婚約の時点で留学を諦めるが、Bさんは打開策を模索している。留学先の国によって人々のイメージは異なり、例えば治安や慣習、ファッションなどの観点から欧米は女性に悪影響が強いと見なされるが、日本はそれらの点で不安が少なく、ウズベキスタンと文化的にかけ離れていないという好印象を持たれている。そのため他国に比べれば日本は女性にとって留学しやすい要素があり、Bさんはこの点から母親や未来の結婚相手の家族から合意を引き出すチャンスがあると企図している。

ウズベキスタンでは女性が22歳になると「古い女」と言われるようになり⁵、地方ではとくに悪い意味を持つ。そのため母親はBさんが22歳になった昨年から頻繁に「結婚しなさい」と言うようになり、お見合いを持ちかけられることが急に増え〔④：お見合い〕、この1年で10人とお見合いをした。Bさんの場合、お見合いすることは断れないが、結婚するかしないかは自分で決めることができ、恋愛結婚も親の条件を満たせば可能だという。しかし、Bさんはそもそも年齢的にまだ結婚は早すぎると考えており大学院進学後に結婚することを希望している。結婚に対しても「ポジティブな面はウェディングドレスを着ることとか花嫁になる結婚式のパーティーだけ」と述べる〔⑤：結婚観〕。姑は嫁に厳しいもので、家事ができない嫁は離婚させられることがあり、それを恐れている。Bさんは自宅で料理を担当することがないため料理が苦手で、一般的なウズベクの価値観である家事力で嫁として評価されることに自信がない。

また、ウズベキスタンでは結婚することが女性の幸せだと考えられているにも関わらず、すでに結婚したBさんの同級生たちは、未婚のBさんに「やりたいことをしているBが1番幸せだよ」と言う。

Bさんは最近結婚した大学の同級生について、夫の両親と同居して家事全般を担い、夜11時半まで学習時間が確保できず、睡眠不足に加えて授業の理解が追いつかないため成績が低下していることを心配している。「彼女を見ても、今はまだ（結婚）できないと思うようになりました」と話し、学生結婚に反対の考えを示している〔⑥：学生結婚〕。

【卒業後の進路】

結婚承諾の決定権をもつ母親とは結婚時期だけでなく結婚相手にも価値観の相違がある。母親はBさんが伝統を重んじる男性と結婚し、専業主婦になることを望んでいるが、Bさんはむしろ世界に目を向けて仕事を続けることを応援してくれる、父親に似た考えの持ち主と結婚することを望んでいる。母親は他にも、同じウズベク民族で同じタシケント出身の大卒であること、将来有望な年上の男性であることといった、ウズベキスタンでは理想的ともいえる典型的条件を順守すべきという姿勢であったが、最近ではBさんを早く結婚させるために若干の譲歩を見せるようになってきた。「実は昨日、母はウズベク人なら誰でもいいと言いつつ」とのこと、母親の焦りが見て取れる。お見合いで条件の良い男性が現れた場合、Bさんは結婚を断ることができないかもしれないとさえ感じ始めている。

キャリア志向のあるBさんは大学院に進学希望であるが、Bさんの言葉通り「ウズベキスタンでは大学院を卒業しても、結婚したら働かない女性が多い」現状がある。Bさんは「結婚したら働かない」ことに否定的であるが、母親は専業主婦になることを望んでいる。母親と今後について頻りに話し合うなかで、「働きたい」「世界を見たい」「旅行したい」と希望を伝え、できるだけ結婚を遅らせたいと訴えるものの、母親は「結婚は来年までなら待てる」という姿勢だ。

そのためBさんとしては、在籍しているX

大学の大学院に進学して、その間に結婚相手を通して留学プログラムに参加することが家族の理解が得られて自分の望みも叶える、最善の方法だろうと考えている。そのような留学スタイルは同大学の女性教師陣に前例が数多くあるため、実現可能性がある。ただし、そのためには理解のあるパートナーの選定が必須となるため、お見合いの際には必ず留学したいこと、働きたいことを告げて相手の反応を見ている。お見合い相手のなかには「大学院に行くことは女性のすることではない」という意見をもつ人もいたが、Bさんの条件をクリアする男性も複数いた〔⑦ I：進路〕。しかし、まだ結婚するのは早いという気持ちの方が強く結婚を見送った。それくらい、許される限界の時期まで結婚を先送りしたいという気持ちが強く、葛藤している。

大学院の先の将来は外交官になりたいと夢見ていたが、「本当にできないので…もう考えない方がいいかと。ウズベキスタンでは男性がやるものだから、女性はできない」と諦めた〔⑦ II：進路〕。現在の夢は、外国語学習センターを立ち上げることで、父親も協力を申し出ている。そこで授業を教えながら経営者となれば、家庭との両立も図りやすいだろうと算段している。

【その他】

Bさんはウズベキスタンの伝統や慣習が女性にとって生きづらいものであると強く感じつつも、ウズベク人にとって家族が最も大切な存在であることには理解と共感をもっている。また、今の若い世代は国際化の影響を受けて新しい考え方をもつようになってきたので「本当は自分の道を自分で選びたい」と考え始めており、現在の抑圧された状況を変えるためには、まずは家族のなかで「女性は女性らしいことをするべきだ」という考え方をなくし、親は娘が人とちがうことをやりたいと言っても聞く耳をもってほしいと願ってい

る。また、女性自身も自分の好きな道に進むため、自分の意見を怖がらずに家族にはっきり言えるようになることが大切だという主張をもっており、Bさん自身、否定されたとしても自分の意見は必ず言葉にして伝えてきた。

3-2-3. Bさんの困難

Bさんの語りにおいて重要な局面であると考えられる①～⑦においてBさんの**学習環境**に生じた**マイナス因子**あるいは**Bさんの心の葛藤**に焦点を当てて考察する。

[①：進路]

Bさんはウズベキスタン社会の規範により、希望の進路を変更することになった。そして、母親が提示した教育の分野から、自身の経験とすり合わせて妥協点を見出し、日本語学科を受験した。これについて淡々と語る口調と、トップ入学を果たして現在も成績優秀であり、現状に満足していること、将来は語学学習センターを開きたいという目標があることなどから、禍根を残してはいないようである。

[②：浪人]

女性は高校卒業と同時に結婚していくものであり、22歳という年齢が目安になっている。同世代では進学するよりも親が決めた人と結婚するのが多数派であり、Bさんに対する周囲の慰めの言葉も進学は諦めるべきという内容のものであった。今までの人生で最も頑張ったことは受験勉強であると話し、当初は法律や経済などの男性社会でキャリアを積むという高い目標をもっていたBさんにとって、受験に失敗したことのショックは非常に大きかったようである。大多数の考えとは異なり、Bさんの家族は進学することを応援し続けて受験勉強のために塾へ通わせ、家事を協力しあう体制を維持したおかげもあり、トップ入学という誇らしい功績をつくることができた。Bさんは進学したいのにできない同級生を不

憫に思っており、自分が受験で道を切り開いたようにこれからも成功を重ねて、これからは女性がBさんのような生き方の選択肢がもてるよう、身近な人たちに影響を与えていきたいという意欲をもっている。

[③：留学]

Bさんの家庭では父が賛成派、母と兄が反対派となり、そのなかでも母の意見が最も影響力をもっているため、Bさんは時期を遅らせて結婚後に夫と一緒に渡航するという妥協点をもって母と交渉しようとしている。

Bさんの家族は大変仲が良く、Bさんと母親は異なる価値観をもっているにもかかわらず話し合いを重ねている。留学によってBさんの評判が下がれば、それは家族にとって恥ずかしいことであり、結婚にも支障を来すことになるため⁶、Bさんが自分の意思を押し通すことが難しくなっているのである。

Bさんは留学試験に受かる可能性を十分持ち合わせ、金銭的な問題もないが、結婚によって留学することが難しくなっている。

[④：お見合い]

一般的に結婚の「適齢期は女性で17歳～25歳、男性も25歳くらいまで」(ダダバエフ2008:169)と考えられており、つまり平均初婚年齢を過ぎると「古い女」と言われるようである。

Bさんの母親はBさんの結婚に焦りつつも、強制的に結婚させようとはしておらず、Bさんが恋愛結婚をすることでも条件さえ満たせば許可しようという考えがある。そうでなければお見合いで早く良いパートナーを見つけたいと考えセッティングしているが、Bさんが1年間で10人もの男性とお見合いをしたというのは頻度が多い方だと思われる。1人の男性とは3回会うまでに答えを出すことが通例となっており、望まないお見合いにプライベートのかなりの時間が割かれている。

[⑤：結婚観]

まず、ウズベキスタンでは結婚したいと思う相手に会おうより先に、「結婚すること」を決める傾向にある。このようなくだりは先行研究でも見られ、Bさんの場合も結婚したいと思う相手はいないが、母親が22歳という年齢を節目に「結婚しなさい」と言うようになった。このように親の方から結婚を促すこともウズベキスタンでは典型的な流れである。

その理由は「親たちは子供の将来に対して道徳的・社会的責任があると感じているが、結婚によってそれが軽減し、若者たちがより成熟し目的をもった生活を送るようになると確信している」(ダダバエフ 2005:218, 2008:169) ためである。

では、娘にとっての結婚はどのようなものだろうか。先行研究ではこの点について指摘されてこなかった。Bさんが結婚に対して、花嫁衣裳を着て結婚式でみんなに祝われることだけが楽しみであって、それ以外はネガティブな要素しかないと断言したことは、注目すべき点である。Bさんはキャリアウーマンになることを夢見ているが、現実には家庭的な妻あるいは母になることばかりが期待されており、それに対して楽しみを見出せていない。それに加えて、すでに結婚したBさんの同級生たちの「やりたいことをしているBが1番幸せだよ」という言葉には、Bさんの進学を羨ましく思っていること、結婚相手を自分で選びたかったこと、姑に気を遣う日々に疲れていることなどが含意されているだろう。

このように、Bさんはポジティブな結婚観が持てないなかでお見合いを繰り返し、刻々と迫る結婚を懸命に先送りしようと奮闘していることが読み取れる。

[⑥：学生結婚]

大学生活を送るなかで、結婚する同級生が徐々に増えていく。彼女たちの新婚生活を間近で見ると、Bさんにとって結婚のリア

リティが増し、結婚に対してさらにネガティブになる心情が語られた。ここで登場したBさんの友人は、このインタビューの直後に妊娠3か月で過労のため入院した。このようなことはウズベキスタンで珍しくないという。

学生結婚についてのウズベキスタンおよび諸外国の統計や研究はほとんどなく、残念ながらウズベキスタンにおける学生結婚の割合を示すデータも他国と比較する材料もない。例えば日本では学生結婚が稀であるものの、欧米諸国においては珍しくない国もあるが、学生結婚が集団や社会に特段の影響をもたらしているとは考えられていないかもしれない。しかし、それらの国々とウズベキスタンにおける結婚の在り方は大きく異なる。ウズベキスタンの場合は結婚から半年あるいは1年以内に出産することが期待されているうえ、学業継続のための(夫を含めた)家族のフォローもほとんどない。むしろ結婚直後は親戚への挨拶や宗教儀礼などのために授業を欠席し、家庭の事情を優先するようになり、すぐに家事・育児の中心的存在となる。こうして卒業前後までに出産した学生は、卒業後に就職することなく専業主婦となるわけである。

[⑦ I II：大学卒業後の進路]

「大学院に行くことは女性のすることではない」という言葉は主に伝統的な価値観に基づくものであろう。実際はウズベキスタンの大学院修士課程における女性の割合は37%⁷と日本に比べて若干高い。

Bさんは大学受験に失敗したときにも周囲から「女性に勉強は必要ない」という言葉をかけられており、義務教育を終えたあとも勉強を続けるうえではこのような固定観念との衝突は避けられないようである。また、労働市場には性別職域分離が存在し、職務上出張や転勤が多いことから女性が外交官になることは望ましくないと考えられる傾向にある。

それとは対照的に、教師はウズベキスタン

でも女性の仕事だと考えられており、幼稚園から大学まで教師は女性が大半を占める。Bさんは教師になることだけでは満足できない様子で、起業してこそ教師になる自分を受け入れられると、妥協点を見出しているのではないだろうか。また、それによってワークライフバランスがとりやすくなれば、それは家族にとっての妥協点にもなり得る。

Bさんは自分で自由に選択する裁量の範囲を広げられるよう、両親の考えを尊重しつつ、自己主張もすることで、少しずつ互いに譲歩しあい、妥協点を見出している。

3-3-1. Cさんのバックグラウンド

Cさんはブハラ州出身で、両親、妹2人、弟1人の6人家族である。X大学英語学科2年生で、第二言語として日本語を専攻している。子どもの頃から高校生まで日本センターに通って日本語を習っていた。

3-3-2. Cさんの語り

【大学受験】

ウズベク社会では「女性はあまり勉強しない方がいい」と言う人も少なくないが、Cさんの両親は大卒で勉強家だったことから、とくに母親はCさんを勉強に厳しく育てた。先生と頻繁に連絡を取り、いつも成績をチェックして悪い点数を取ると叱った。

教育熱心な母親は、Cさんが小学生のときに日本センターへ連れて行った。Cさんはそれまで日本に興味がなかったが、見学してみると良い印象を得たため日本語を習い始めた。順調に日本語力を伸ばしていったが、大学の受験勉強を始めたときに、父親に受験を優先するよう叱られ、日本語能力試験N3を取得すると日本語学習を一時中断した。その代わり、受験のための塾通いが忙しくなった。

両親はCさんの大学受験を心から応援したが、Cさんが首都にあるX大学を受験すると決めた当初は「女の子がひとりで暮らすのは

大変なこと」「実家から遠い首都で、どうやって暮らすつもりなのか」と反対し、自宅から通えるブハラ大学を受験するよう勧めた。Cさんは大学で主に英語を学びつつ、これまで培ってきた日本語力も伸ばしたいと考えていたが、ブハラ大学には英語学部はあるものの第二言語はフランス語とドイツ語しか選択できない。X大学は国内で唯一、英語を主専攻、日本語を副専攻とすることができる大学であるため、X大学への進学を熱望したのである。祖母が首都で暮らしていることから両親は妥協し、Cさんは希望通りに願書を提出することができた。両親はCさんが受験勉強に専念する環境を整え、妹たちに家事を担わせた。

【浪人】

ところが、Cさんは一度目の受験に失敗してしまう。高校の成績が優秀だったため、周囲の人々はCさんなら当然合格するだろうと予測していた。それだけに、Cさん自身も家族もショックが大きかった。しかも、Cさんの獲得点数はブハラ大学を受けていれば特待生になれた水準であった。それでも母親は「誰でも浪人するものよ」「1回の受験で大学に入るのは難しいこと」と言葉をかけ、父親は「どうして泣く？ほかの親みたいに『結婚しなさい』とは言わない。もう1年間、勉強だけしなさい」と言って励ましたが、Cさんから見えないところ（別室）で2人は忍び泣いていた。

家族はCさんの浪人生活を全面的に応援した。Cさんは塾以外で外出することなく、家事もせずに受験勉強だけをして過ごした。

こうして迎えた二回目の受験でCさんは点数を伸ばし、X大学に合格を果たす。特待生枠には届かなかったが、両親は心から喜んだ。

【留学】

Cさんは4人姉弟で全員が大学進学を希望しているため、両親は学費のために懸命に働いている。その苦労を見ているため、Cさん

は入学後も努力して優秀な成績を収め、課外活動にも積極的に参加して、給付型奨学金の対象者に選ばれた。二年次に日本への国費留学にも応募したが、選考に落ちてしまった。私費留学のチャンスもあったが金銭的負担が大きいため諦めざるを得ず、次年度に再び国費留学に挑戦するつもりである。父親は欧米諸国への留学であれば結婚相手と一緒に行かない限り許可しない考えであるが、日本センターに通うCさんから日本についてたくさんの情報を得て「日本人はウズベク人と似ていて親切で礼儀正しい」ので、日本ならば留学しても構わないと判断している。母親は「Cさんはどこにいても真面目に勉強する」と信じているので、とくに国を問わずして留学に賛成しているという。

ウズベク社会において、娘の大学進学や留学に理解がある親は多くないことをCさんは悟っている。大学進学には大金が必要であるため、多くの親は娘を大学に行かせないことが多い。故郷のブハラ州でもCさんと同じように浪人した女性はたくさんいるが、多くは勉強を続けることができず、親に結婚させられた。Cさんは自身を相当恵まれた娘であると自認している。

【家事】

大学進学後、Cさんはほかの学生3人と寮で共同生活をしている。調理や掃除は当番制だ。

Cさんが幼稚園に入るときに母親が会社勤めを始めたので、Cさんは小学一年生の時には妹を幼稚園から連れ帰り、一緒に掃除をして、小学四年生の時には料理をするようになった。そのため家事には慣れている。実家に帰省した時にも家事を手伝っているが、主に妹たちが担っている。Cさんは親元を離れて暮らしているため帰省時には「両親に甘やかされている」と妹たちは僻む。妹たちは現在大学受験を控えているが、勉強と家事を両立して過ごしている。Cさんは、妹たちのどち

らか一人には地元の大学へ進学して母親の手伝いをしてほしいと思っている。

【卒業後の進路】

Cさんは大学卒業後について、英語あるいは日本語の教師として働きながら大学院へ進学したいと希望している。また、同時に結婚もしたいと考えている。その理由は、妹に結婚するチャンスを与えるためである。ウズベクistanでは姉妹（あるいは兄弟）の結婚順は年功序列であるべきという考え方が強く、妹が姉より先に結婚することは難しい。そのため、Cさんは妹たちが好きな人と結婚したい時に自分がそれを妨げる存在にならないようにしたいと考えているのである。

Cさんの母親は、地方テレビ局のアナウンサーとして活躍している。長女であるCさんと母親の絆は強く、Cさんのキャリアビジョンは母親の影響を強く受けている。Cさんも結婚後は家庭を最優先にするつもりでなるべくたくさんの子どもを産み育て、育児についても母親が自分にしてくれたことは、自分の子どもにもしてあげたいと考えている。また、それと同時に社会の役に立たなければならぬという考えも持ち、大学院を卒業したら子どもを産んで、子どもが幼稚園に通うようになったら仕事を再開したいと望んでいる。教師として経験を積み、自ら語学学校を開いてビジネスを展開したいという思いもある。

【結婚観】

同級生に結婚している女子学生が二人いて、そのうち一人は出産もした。二人はとても幸せそうに見えるが、授業中に寝ていることもある。先生に注意されるが、妊婦である、あるいは子育てをしているという理由で成績は甘くつけられている。また、授業後は家事のために急いで帰宅するため、友人たちと楽しい時間を過ごすことがない。こうした状況を見てCさんは、在学中は結婚するのに適切な

時期ではないと考えている。しかし、まわりの友人たちは家族に結婚を勧められたり、結婚したがっている妹の足かせにならないよう、近いうちに結婚しようとする人が多い。

Cさんは大学院進学後に結婚したいと希望しており、この点は上述の見解と矛盾しているように思えるが、Cさんは大学院の授業は学部よりも少ないので、仕事もフルタイムではなくパートタイムで働けば、結婚生活との両立が可能になると見込んでいる。

Cさんの両親はCさんが将来的に恋愛結婚することを望んでおり、家事と学問を両立するのは難しいことなので大学を卒業して専門性を身につけてから結婚するのが良いと論じている。両親はCさんに結婚を急かすことがないものの、Cさんは周囲から「早く結婚すべき」と諭されることがある。同級生たちは、修士の学位を取得したり大学で教員をしている女性に対して、「どうして結婚しないのか」と噂するものであり、Cさんは自分がそうした立場になることを避けたいと考えている。

Cさんは結婚に幸せなイメージを持ち、心から楽しみにしている。両親の結婚観に賛成の立場で、ウズベキスタンのお見合い結婚は当人同士が1日だけ話をして、親の判断で結婚を決めてしまうが、不仲で離婚してしまうケースもあるので、恋愛を経てお互いによく理解してから結婚に至るべきだと考えている。

父親は、結婚相手の出身大学や人柄を確認し、まずは自分の心と向き合って自分で決めることが一番大切だとCさんに論じている。ただし、両親は同郷出身者同士、同じ民族同士で結婚すべきというウズベキスタンの伝統的な価値観を持っており、Cさんはそれを受け入れ、それが自分にとっても望ましいと考えている。また、理想的な結婚相手として欠かせない条件は大卒であることだ。そうでなければ、勉強してきたCさんのことを理解することはできないというのが理由である。

3-3-3. Cさんの困難

Cさんは、自分の学業や人生についてとくに困難を抱えているとは考えておらず、困難に焦点を当てて分析することはできなかったため、なぜ困難を感じていないかについて分析したい。

家事については、一般家庭と同様に娘が担うことになっているが、Cさんは幼い頃は家事の主担当であったものの、受験時期を迎える頃にはその役割が妹たちに移行され、Cさんの学業に支障を来すことはなかった。進路については、両親がCさんの希望を受け入れ、実家から通える大学ではなくても承諾したうえ、浪人生活を温かく支え、留学にも理解を示している。Cさんは自分が一般的な女性よりも恵まれていると感じ、両親に感謝の念をもつことで、気持ちよく勉学に励んでいるのである。また、両親は伝統的な固定観念に縛られすぎず、留学を含めた学問や仕事でのキャリア形成に対して一定の理解があるため、Cさん自身が何かを諦める経験をすることはなかった。大学の進路を除けば、Cさんは両親の教えに従順な優等生として人生を歩んでおり、Cさんの語りからは両親やウズベク社会の価値観に逆らおうという気持ちがないことが読み取れる。

CさんとCさんの両親がそれぞれ自覚している通り、Cさんの両親は一般的なウズベク人の価値観とは少々異なり、娘に対して高等教育を重んじ、恋愛結婚を勧めている。Cさんにとってそうした両親の教えは心地よいものであるため、受け入れやすく、結婚に対してもポジティブになっている。つまり、Cさんが学習上の困難を感じていない理由は、両親がCさんに一定程度の決定権を与えていることにあると言えよう。

3-4 考察

A・Bさんは異なる家庭環境にありながらも類似した学習上の困難を抱えている傾向に

表2：各インタビューイのナラティブ

		A	B	C
話し方		落ち着いた言葉を選びながら	淡々と、他人について話すように	明るく笑顔で
転機	事柄	大学に行かないことは、高校卒業後すぐに結婚するということを意味している	友人のなかには成績優秀で大学進学を望んでいたのに、両親が決めた人と結婚して進学することができないケースが多く、自分自身も周囲からそうした価値観の押し付けに遭った	大学受験に失敗すると、両親がCさんから見えないところ（別室）で泣き泣いていたにも関わらず、自分には励ましの言葉をかけてくれた
	言葉	親：「次もだめなら結婚しろ」	浪人中に周囲の人々から：「女性に勉強は必要ない」「結婚した方がいい」	親：「どうして泣く？ほかの親みたいに『結婚しなさい』とは言わない。もう1年間、勉強だけしなさい」
感情的に語られたエピソード		(1) 家事をしないで勉強だけしていると親が怒った態度をとる (2) お見合いさせられたこと (3) いずれ結婚を先送りする言い訳が尽きてしまうときが来ること	(1) 母親がもつ伝統的価値観との対立 (2) 留学するためには結婚相手が必要であり、お見合いを受け入れているが、良い人がいても「まだ結婚したくない」気持ちが強いという葛藤	妹・弟たちも大学に行くので、親にこれ以上の金銭的負担をかけられない ① 給付型奨学金を獲得 ② 私費留学はしない ③ 妹ひとりには地元に残って母親を手伝ってもらいたい
親になる言葉		女性は自分の意見が言えない／言わない		自分は恵まれた娘

ある。一方、Cさんには困難が少なく、前者とは対照的な語りであった。大きな違いは、A・Bさんの親が伝統的な価値観を強く持ち、娘に対してそれを押し付ける傾向が見られるものの、Cさんの親は将来の結婚相手に対して伝統的な価値観を持ちつつ、結婚以上に教育に対して熱心であり、Cさんの向学心に理解と励ましの姿勢を持っている点である。

各インタビューイのナラティブを整理した表2を見ると、三者とも転機は受験失敗に伴う苦境を乗り越えた経験であった。これによってますます受験勉強に励み、大学入学を果たしたことで自信をつけている。また、B・Cさんは友人たちが大学受験を諦めなければならぬ中、両親に浪人生活を支えられて進学を果たした経緯から、「周りの人たちができないことを自分はできている」という自覚があり、優越感や幸福感につながっている。その意味では両者に一般家庭とは異なる背景があるものの、Bさんの場合はとくに父親が先進的な考え方を持っていたとしてもそれが母親によって打ち消されている部分がある。三事例に共通する点でもあるが、娘に対する母親の影響力の強さが読み取れる。

Cさんはある程度の伝統的価値観を受け入れ、困難が少ないケースであったが、彼女の

家庭環境がウズベク社会そのものを反映しているとは言えない。むしろAさんは、高校時代の成績が平凡で浪人期間も二年あり、家族から学習環境のための特別なサポートもなく、一般的なウズベク家庭出身者のケースに該当するが、個人の努力で希少な国費留学のチャンスを手に入れている。

Aさんは親による結婚の期待に対する反骨精神がキャリア形成のエネルギー源になっており、Bさんは母親と交渉、駆け引きをしながら自分の進みたい道に向かっている。両者は、多くのウズベク女性が抑圧から解放されることを願っていてもいる。一方、Cさんは両親への尊敬、愛情、感謝の気持ちを糧にして勉強に励んでおり、対極的な親子関係によるモチベーションが見て取れる。

AさんとBさんは自分の意見を両親に伝えたいという交渉や駆け引きを行っており、自分を除いた一般的な女性たちが「自分の意見を言えない／言わない」という文脈で語ったが、全体的には自分の意見も完全には汲み取られていないという切ない思いが包含されていた。

先行研究で指摘されている通り、本調査でも高等教育における入学格差の背景にはジェンダー・ステレオタイプと早期結婚があることが示され、さらに本調査では、若い女性が

実はネガティブな結婚観を持っていることが明らかになった。ウズベク人にとって結婚の意義は特に深く、自立や幸福の象徴として認識されてきたため、これはウズベキスタンを知る者にとって意外性の大きい知見であり、時代の変化を反映したものであると言えよう。早婚を問題視し、晩婚を望む女性がいるものの、両親をはじめとする周囲の人々がそれを許さない構図が未だ顕在している。三事例に共通して、本人の意向が両親に無視されたり強制されることはなく、時には受け入れられる場面も見られたが、本人が言い訳できない状況になると意見を押し通すことが難しく、屈するしかない場面も見受けられた。つまり、女性本人の意向がある程度尊重されても、優先される傾向はなく、女性本人が決定権をもつ立場にはないのである。これはウズベキスタンの人々に一般的に自認されており、女性は結婚するまでは親の判断のもとにあり、結婚後は夫の判断のもとにあると言われている。ウズベク女性は結果的に親の判断を受け入れるしかない状況に置かれやすく、また、同調圧力が強いウズベク社会では周りの評判を気にするため、インタビューーたちも大学生でありながら親が世間体を強く気にすることから自己主張を押し通すことが難しくなっている。そのため、親の判断に対して従順である、あるいは表面上従順であるように見せる女性が多い。また、子どもの家事参加によって母親の就労が実現するため、彼女たちは子どもの頃から家事を担い、結婚して子どもを産み育てることで自らも家事から解放されることになる。結婚すると夫が主となるため、彼女たちは結婚相手をよく見定める。A～Cさんのいずれもが、自分の良き理解者となるパートナーでなければ結婚しないと決意していることから、それが読み取れる。

三者の語りでは同級生たちの意見や状況についても述べられた。困難間の関連とこれらの情報を鑑みたくて女子大学生における学

習上の困難として具体的に示唆されたのは、

- (1) 結婚または結婚生活を想定したうえで進学、留学、就職について検討されること、
- (2) 学生結婚によって儀式や家庭での役割が増加し学問との両立が困難となりやすいこと、
- (3) 自分の望むキャリアパスが両親(とくに母親)の価値観や社会的評価に阻まれやすいこと、
- (4) 自宅生は家事を担いながら学生生活を送っていることである。Cさんのケースでは、妹がCさんの代わりに家事を担っており、やはり娘が家事を担う形式になっていることに留意したい。

筆者は、先行研究の提案通りに通信教育課程の整備やインセンティブの付与、あるいは他国の成功事例のように宗教的価値観に働きかけ、学生寮完備の女子大学を創設して親が安心して娘を送り出せる環境を整えることで、女性の高等教育機関への就学率が高まる可能性があると考えるが、女子大学生の困難は就学後にもつきまとう。3年生頃に婚約して卒業時期に出産するというのが一種のパターンになっており、留学、就職、大学院進学を妨げる家族や社会の固定観念と折り合いをつけるか、あるいは衝突し、望まないお見合いを経験したり、学問よりも家庭を優先して学習環境の確保が難しくなる。生涯を通して結婚願望を持たないインタビューーはいなかったが、こうした状況を女子大学生は批判的に見ている。また、就職は出産して末子が幼稚園へ行くようになったあとのタイミングとなるため、学問に対するモチベーションを維持したり、身に着けた専門性を活かすことが難しい。つまり、女子大学生は自分の歩む人生に主体的な決定権を持っていないため、親が娘の高等教育に本質的な価値を見出さなければ、女子大学生本人に学習意欲があっても、結果的には良い結婚相手を見つけるため、あるいは良妻賢母になるための大学進学という社会的位置づけになってしまうのである。

元来より保守的なウズベク民族は、未だ社

会として新たな女性像を受け入れていないものの、より多くの女性たちがジェンダー差異を認識し、それに意識を向けるようになってきていることがインタビューの語りから伺えた。ウズベキスタンの独立後の歴史をふまえると、ウズベク民族が革命や運動という類のものから縁遠いことは周知の事実であり、今後もフェミニズム運動の萌芽が見られるとは考えにくい。しかし、こうした環境のなかでキャリア志向を持つ意欲的な女性の姿があり、とくに A さんと B さんは公的・私的な場面において躊躇なく女性の権利や男女平等の概念を自分の意見として投げかけている。これはイスラム教の教義や土着の伝統、さらには過去の政治思想からの変革の表れでもある。こうした様子から、ウズベク女性たちが自ら道を切り開こうとする“静かな闘い”が始まりつつあるように伺える。

4. まとめ

本論文は、ウズベキスタンにおいて女性が高等教育を受ける上での困難を当事者目線で捉え直すことを目的として調査を行った。調査結果から明らかになった困難は、主に親から背負わされる伝統的な価値観に基づくものが多く、とくに早婚への抵抗から進学や留学を目指す状況があると明らかになった。また、早婚は高等教育の就学率だけではなく就学後の学習環境にも大きな影響を与えていることも明らかになったうえ、自宅生にとっての家事と学業の両立についてはこれまで先行研究でふれられたことがなく、新たな論点を提供することとなった。

徐々に変化がみられつつある環境の変化もあるが、欧米型への急速な変化が生じるとは考えにくいいため、ウズベキスタンの伝統を大切に守っているウズベク人の意志を尊重しつつ、女子大学生をサポートする方法について検討することが、ウズベク人にとって受け入れやすく望ましい提案であると筆者は考える。

たとえば、高校の進路指導や大学の広報などでイスラム教の見地から女性が高等教育を受けることの意味や価値について親が認識し、学習環境をつくれるように働きかけること、大学内に結婚・妊娠・出産と学生生活を両立するためのアドバイザーや妊娠中の学生が体調管理できる保健室を設置することで、少なくとも当事者が抱える精神的な負荷を和らげ、モチベートすることが可能となるだろう。

残された課題として、今後は本調査の比較材料として考察を深めるため、類似のキャリア志向をもった男子大学生に対しても同様のインタビューを行いたい。また、本調査は X 大学の特定のキャリア志向を持った学生だけを対象としたため、本調査結果をふまえたうえで広範な女子大学生を対象としてアンケート調査を行い、今回のサンプルがどの程度の割合で当てはまるか検証し、学習環境を整えるためのニーズ調査を行うことで新たな知見が得られると考える。これらと並行して、ウズベキスタンと同じように学生結婚が珍しくない国々における対処事例についても継続的に情報収集をしていきたい。

注

- ¹ 独立後はウズベク民族がもつアイデンティティへの回帰（伝統的な男女の役割分業を含む）が重んじられつつも、ダダバエフ（2008：168）が「ウズベキスタン政府は、教育や就業などの面で、社会における女性の役割を制限していない（むしろ推進する力をしている）」と述べている通り、政策面においては一定の努力もなされてきた。
- ² ウズベキスタンにおける高等教育機関には、Comprehensive Universities / Specialized Universities / Institute / Academy があり、すべて国立である。
- ³ 総人口の 83.8%をウズベク民族が占める（The State Committee of the Republic of Uzbekistan on Statistics 2017）。
- ⁴ とくに「開発途上国」に位置付けられる国々では長女が母親の役割を代替するといった類似の習慣を含めて、よく見られることである。
- ⁵ 2016年の女性の平均初婚年齢は22.6歳、男性の平均初婚年齢は26.0歳で、2000年は女性が21.4歳、男性が24.2歳であったことから緩やかな晩婚傾向にある（SCRUS 2017）。なお、女性の初産の平均年齢は2013年で23.4歳（UNECE 2017：112）。
- ⁶ ウズベキスタンではお見合い前に縁故を最大限に活用して相手の情報収集をしあうものである。

⁷ The State Committee of the Republic of Uzbekistan on Statistics (2017 : 180) をもとに筆者が算出。

文献

- ダダバエフ, ティムール (2005) 「第 11 章 ウズベキスタン: ソ連崩壊後の現実」, 猪口孝, M・バサネズ, 田中明彦, T・ダダバエフ編著『アジア・バロメーター 都市部の価値観と生活スタイル』明石書店, 205-234.
- ダダバエフ, ティムール (2008) 『社会主義後のウズベキスタン—変わる国と揺れる人々の心』アジア経済研究所.
- Ibrahim, Saima (2013) *Status of Women in Uzbekistan*, IOSR Journal Of Humanities And Social Science (IOSR-JHSS) Volume 10, Issue 3 (Mar. - Apr. 2013), 47-55.
- Kamp, Marianne (2009) *Women's Studies and Gender Studies in Central Asia: Are We Talking to One Another?*, Central Eurasian Studies Review 8(1), 2-12.
- Kurbanova, Mohira R. (2010) *Times of Courage: Women's NGO Movement in Uzbekistan*, Doctoral dissertation, Ohio University.
- 嶺井明子・川野辺敏編著 (2012) 『中央アジアの教育とグローバリズム』東信堂.
- Nurdinova, Shoirakhon (2014) *HUMAN DEVELOPMENT AND WOMEN EMPLOYMENT IN UZBEKISTAN: SITUATION AND PROBLEMS*, Regional Formation and Development Studies, No. 2 (13), 88-95.
- Ruziev & Burkhanov (2018) *Uzbekistan: Higher Education Reforms and the Changing Landscape Since Independence, 25 Years of Transformations of Higher Education Systems in Post-Soviet Countries*, 435-459.
- 桜井厚・小林多寿子編著 (2005) 『ライフストーリー・インタビュー—質的研究入門』せりか書房.
- 菅野琴・長岡智寿子・西村幹子 (2012) 『ジェンダーと国際教育開発—課題と挑戦』福村出版.
- トフタミルザエヴァ, マシフラホン (2016) 「現代ウズベキスタンの社会変容と教育」東京外国語大学, 博士論文.
- トフタミルザエヴァ, マシフラホン (2014) 「現代ウズベキスタンにおける教育の平等化をめざして: 関啓子『コーカサスと中央アジアの人間形成』を読んで (書評論文)」『Quadrante: クアドランテ: 四分儀: 地域・文化・位置のための総合雑誌』, No.16, 225-235.
- トフタミルザエヴァ, マシフラホン・蒲生慶一 (2014) 「独立後のウズベキスタンにおける教育改革と就学率の変化: 教育改革の今後の課題」『Quadrante: クアドランテ: 四分儀: 地域・文化・位置のための総合雑誌』, No.16, 153-175.
- Turaeva, Rano (2017) *Gender and Changing Women's Roles in Uzbekistan: From Soviet Workers to Post-Soviet Entrepreneurs*, Constructing the Uzbek state: narratives of post-Soviet years, 303-318.
- 湯川隆子 (2006) 「大学生におけるジェンダー認識の変容過程—本学『ジェンダー論』講義の学習効果から—」『総合研究所所報』, Vol.14 号, 29-51.
- 湯川隆子・石田勢津子 (2005) 「ジェンダー認知の変容とその測定方法の検討」『奈良大学紀要』第 33 号, 81-93.

資料

Coalition of Uzbek Women's Rights NGOs (2009a) *Women's Rights in Uzbekistan. Briefing note to the UN Committee on the Elimination of All Forms of Discrimination against Women. Tashkent.*

Coalition of Uzbek Women's Rights NGOs (2009b) *Shadow Report to the Committee on the Elimination of All Forms of Discrimination against Women. Tashkent.*

The State Committee of the Republic of Uzbekistan on Statistics (2017) *STATISTICAL REVIEW OF THE REPUBLIC OF UZBEKISTAN.*

United Nations (2018) *World Statistics Pocketbook 2018.*

UNECE (2017) *UNECE Countries in Figures 2017.*

WEB サイト

- Asian Development Bank (2014) “UZBEKISTAN COUNTRY GENDER ASSESSMENT Gender and Development / Central and West Asia / 2014” (<https://www.adb.org/sites/default/files/institutional-document/42767/files/uzbekistan-country-gender-assessment.pdf>) 閲覧日 2018.12.31
- JETRO (2018) 『『あるべき女性像』と闘う女性たち (ウズベキスタン)』 (<https://www.jetro.go.jp/biz/areareports/special/2018/03/01/fb05dbd933cb6bd9.html>) 閲覧日 2019.4.21
- Ministry of Higher and Secondary Specialized Education of the Republic of Uzbekistan (2015) “STATISTICS:Respublikabo'yicha oliy ta'lim qabr ko'rsatichlari(2018-2019 o'quv yil)” (<http://edu.uz/en/pages/sss#daksh>) 閲覧日 2019.7.24
- openDemocracy (2019) “In Uzbekistan, women's rights are changing - but not fast enough” (<https://www.opendemocracy.net/en/odr/uzbekistan-gender-inequality-violence-en/>) 閲覧日 2019.8.3.
- The State Committee of the Republic of Uzbekistan on Statistics (2018) “Higher education” (<https://gender.stat.uz/en/osnovnye-pokazateli-en/obrazovanie-en/vysshee-en>) 閲覧日 2019.6.22.
- The State Committee of the Republic of Uzbekistan on Statistics (2017) “DEMOGRAPHIC SITUATION IN THE REPUBLIC OF UZBEKISTAN” (<https://stat.uz/en/435-analiticheskie-materialy-en/2075-demographic-situation-in-the-republic-of-uzbekistan>) 閲覧日 2019.6.22.
- UNESCO (2017) “Browse by country UZBEKISTAN” (<http://uis.unesco.org/en/country/uz>) 閲覧日 2019.6.23.
- UzDaily (2018a) “President signs decree to improve activities in field of supporting women and strengthening family institution” (<https://www.uzdaily.uz/en/post/42594>) 閲覧日 2019.8.3.
- UzDaily (2018b) “Address by the President of the Republic of Uzbekistan Shavkat Mirziyoyev to Oliy Majlis” (<https://www.uzdaily.com/articles-id-47168.htm>) 閲覧日 2018.12.29
- World Bank (2017) “School enrollment, tertiary (gross), gender parity index (GPI)” (<https://data.worldbank.org/indicator/SE.ENR.TERT.FM.ZS?locations=UZ>) 閲覧日 2019.6.16.
- World Bank (2014) *Uzbekistan: Modernizing Tertiary Education*. Washington, (<http://pubdocs.worldbank.org/en/236211484721686087/Uzbekistan-Higher-Education-Report-2014-en.pdf>) 閲覧日 2019.7.23.
- World Bank (2013) “Uzbekistan - Gender at a glance” (<http://documents.worldbank.org/curated/en/395981468337896074/Uzbekistan-Gender-at-a-glance>) 閲覧日 2019.4.26